

国立 国会 図書館

月報

NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2023.4



展示会「スペイン語でつながる子どもの本―スペインと中南米から」関連講演

「スペインと中南米の子どもの本―この100年の変遷と今―」

宇野 和美

法令議会資料いま・むかし―調査方法の変遷―

本の森を歩く 第29回

江戸時代の大酒飲み、大食い

国立 国会 図書館 月報

NO. 744
APRIL 2023

CONTENTS

1 『日本化学総覧』

—日本の科学の発展に寄与した科学文献抄録誌—
今月の二冊 国立国会図書館の蔵書から

5 展示会「スペイン語でつながる子どもの本

—スペインと中南米から— 関連講演

「スペインと中南米の子どもの本

—この100年の変遷と今—」 宇野 和美

12 法令議会資料いま・むかし—調査方法の変遷—

19 本の森を歩く 第29回

江戸時代の大酒飲み、大食い

18 館内スコープ

未来の国立国会図書館職員を迎えるために

30 本屋がない本

『足元から紐解く生活史 第34回企画展』

31 NDL TOPICS



表紙：「諸國名所百景 武州横濱岩龜樓」
歌川広重(2世)画 [魚屋栄吉] [万延1(1860)年]
1枚 36.7×24.8cm
(『諸國名所百景』所収)
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1309805>

『日本化学総覧』 —日本の科学の発展に寄与した科学文献抄録誌—

宍戸真梨



眞島利行博士
画像提供：東北大学史料館



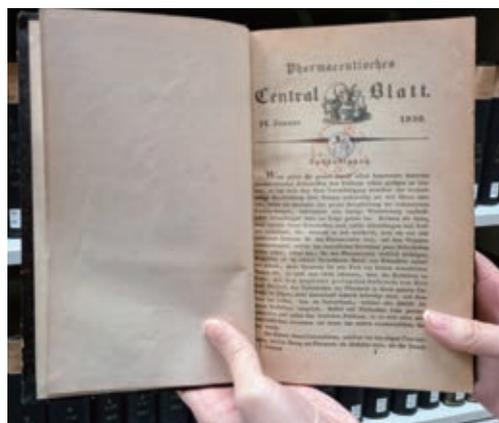
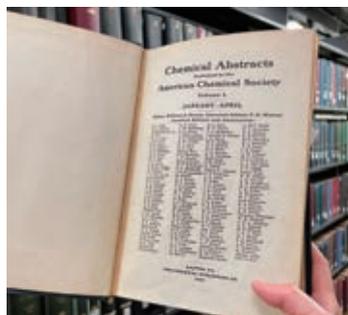
日本化学総覧

日本化学研究会・技報堂 昭和2 (1927) ~昭和38 (1963) 刊
<請求記号 Z17-448> (第1集第1巻)

『日本化学総覧』は、第1集7巻、第2集37巻、総索引15巻から成る、日本の科学技術文献及び特許の抄録誌である。理学、工学、医学、薬学、農学といった科学技術分野全般を対象に、明治10 (1877) 年以降の研究論文24万2263件、日本特許10万5954件の抄録を収めたもので、昭和2 (1927) 年から昭和38 (1963) 年にかけて刊行された。学術研究上、先行研究を把握するための文献調査は、かなりの労力を費やす作業とされる。ドイツやアメリカでは、早くから化学文献の抄録誌 *Chemisches Zentralblatt* (1830年創刊) や *Chemical Abstracts* (1907年創刊) が刊行され、科学者の研究活動を助けた。しかし、これら海外抄録誌に和文文献が収載されることは極めて稀であり、和文文献の調査は困難な状況にあった。そこで、我が国の文献抄録誌の必要性を訴え、創刊の中心となったのが、漆の主成分ウルシドールの合成法を発見するなど自身も化学者としての功績を持つ、東北帝国大学教授 (当時) の眞島利行博士 (1874~1962) である。

大正・昭和初期において、報文・特許情報を網羅的に収集し抄録にまとめることは、非常に骨の折れる作業であった。まずは、図書館などへ出向き、雑誌類を収集して抄録を行

Chemical Abstracts < Z53-A495 >
 (左)は、東京本館科学技術・経済情報室で初号から冊子体最終号まで開架し、手に取って見られる。また、Chemisches Zentralblatt < Z55-A78 > (右)も、関西館で初号から所蔵している (開架)。



日本化学総覧抄録依頼伝票 No. 1317 日附 34.6.15

著者名	神立誠, 内藤博			
題目	シリカゲル分配クロマトグラフィーによる中性アミノ酸の定量			
原籍	名 称	巻 一 号	頁 一 至 頁	発 行 行
	農化	33-3	170 - 174	昭 34年 3 月
依頼先	麻生	※ 抄録者名		頁

500(35.7)

抄録のための伝票 『情報管理』9(5)「日本化学総覧」の憶い出、p.239 第1図 抄録依頼伝票の記入例 (125×80mm)を転載

う報文を選定しなければならぬ。そして、選定された報文について、その専門分野ごとに大学の教職員などへ抄録作成を依頼する。その際、依頼番号や依頼月などを記載した抄録カードを作成し、莫大な情報の整理に活用した。返送された抄録の編集作業は、眞島博士の研究室の若い研究者らが担った。博士自らも全ての原稿に目を通し、真っ赤になるまで原稿に校正の赤字を入れたという。

さらに、『日本化学総覧』の刊行及び刊行継続には、出版費用の捻出といった経済的苦難に加え、関東大震災、大恐慌、戦災といった様々な困難を乗り越えなければならなかった。特に、昭和20(1945)年、編纂作業の拠点であった宮城県仙台市が空襲を受けた際には、地下壕に避難させていた編纂中の資料を除き、資料や作業所が焼失する事態にも見舞われた。戦後は焼け跡にバラックを建て、業務を再開させたという。

ここで実際に『日本化学総覧』で論文抄録を調べてみたい。

抄録は、実験概要・実験結果や特許情報について多くが数行から十数行で簡潔にまとめられており、著者名索引、特許索引、事物索引(欧文含む)などの索引がある。

例えば、著者名索引から森鷗外の本名である「森林太郎」を引き(写真A)、確認でき

『日本化学総覧』の論文抄録で森 鷗外(森 林太郎)を調べてみる

陸軍医学校時代の森鷗外
『軍医森鷗外』文松堂書店、
1943
https://dl.ndl.go.jp/pid/
1069409/1/5 (モノクロ
画像)



森 理：疥癬に生松葉¹, 205.
森 林太郎：日本兵食論¹, 62,
78. 兵食検査成績略報¹, 143.
麥酒の利尿作用¹, 98. 非日本
食論につき¹, 117. 牛肉罐詰の
成分¹, 264. 東京市販牛乳中の
牛糞¹, 265. 便利醬油¹, 267.

写真A 『日本化学総覧』(1877-1940) 総索引3, p.480
<請求記号 Z17-448>

諸種の牛肉罐詰の成分に就て 森 林 大 郎
著者の業室に於て左記5種の牛肉罐詰を分析し、之
等な比較批評したるものなり、下に分析成分表、重量
表、Ulex 氏との比較表を抄録す。
(a) 分析成分表。

罐詰の名稱若く は符號	水	蛋白	脂肪	灰
Corned beef	61.05%	27.98%	7.00%	3.97%
A3 號 罐 詰	75.84%	21.84%	1.19%	1.13%
B2 號 同	27.07%	28.65%	2.03%	2.25%
廣島製牛肉個煮	57.85%	32.34%	5.93%	3.88%
長崎製 同 上	46.20%	35.17%	13.02%	5.61%

(b) 重量表。

罐及内容	内容	固分	罐及内容 100 重量中固分
Corned beef	88.3g	717g	279.27g 32g
A 3	610"	493"	119.11" 19"
B 2	569"	440"	146.59" 26"
廣島製 牛肉個煮	1152.0"	965.0"	406.817" 35.31"
長崎製 牛肉個煮	227.0"	140.0"	75.325" 33.17"

(c) Corned beef の Ulex 氏の分析と著者の分析と
の比較。

	水	蛋白	脂肪	灰
Ulex	56.9	33.8	6.4	2.9
森	61.05	27.98	7.00	3.97

(東醫會 8, 496—497 (牧))

写真C 『日本化学総覧』(1877-1940)第1集第1巻, p.264
<請求記号 Z17-448>

日本兵食論大意 森 林 大 郎
兵役に服する年齢に當れる日本人の身體を養ふに必
要なる栄養質を計算したり。

	蛋白	無窒素營養質(脂肪量に算定す)
在營	101*	228*
演習	111	241
戦時	117	255

更に兵卒一人一日の食量を得たり。

	在營	演習時	戦時
米、未炊	650*	680*	730*
魚	220	270	300
豆 腐	200	200	200
味 噌	60	60	60
蛋 白	101.59	111.16	119.52
脂 肪	20.41	23.25	25.07
澱 粉	497.44	519.88	557.28
無窒素物	234.84	247.95	265.27

(醫新 192, 11—21・東醫事新 425, 669—673; 426,
702—709 (井))

写真B 『日本化学総覧』(1877-1940)第1集第1巻, p.62
<請求記号 Z17-448>

た論文について、抄録が掲載された巻号に当
たってみる。
兵役年齢に當たる日本人が必要な栄養素
を、在營時・演習時・戦時でそれぞれ計算し
た「日本兵食論大意」(写真B)や、5種の
牛肉缶詰を分析し比較した「諸種の牛肉罐詰
の成分に就て」(写真C)など、軍医であつ
た森鷗外が執筆した論文の抄録に加え、原文
が掲載されている雑誌情報を調べることがで
きる。

○参考文献

『日本化学総覧』第1集第1巻「序文」, 1927.7
<Z17-448>

『日本化学総覧』総索引(1)「序文」, 1953.8
<Z17-448>

久保田尚志「日本の有機化学の開拓者 真島利行(第4回)」『化学史研究』30, 2003, pp.231-255 <Z17-702>

山口達明・滝口泰之「『日本化学総覧』で明治大正期日本の化学を発掘しましょう」『化学史研究』48, 2021, pp.74-78 <Z17-702>

迫利右工門「化学総覧のことども」『真島利行先生 遺稿と追憶』真島利行先生遺稿集刊行委員会, 1970, pp.478-482 <GK82-8>

有田正規『学術出版の来た道』岩波書店, 2021
<UE13-M4>

迫利右工門「『日本化学総覧』の憶い出」『情報管理』9(5), 1966.8, pp.238-242 <Z14-375>

※< >内は当館請求記号



東京本館で所蔵する『日本化学総覧』

様々な苦難を経て刊行された『日本化学総覧』ではあるが、当時の研究者・技術者にとって、文献調査の労務を省力化させ、ひいては我が国の科学の発展に果たした役割は大きかった。令和4(2022)年には、同書は日本の科学技術文献抄録誌の先駆けとして、日本化学会の定める「化学遺産」に認定された。なお、昭和39(1964)年以降、刊行元が、真島博士が設立した「財団法人日本化学研究会」から、特殊法人日本科学技術情報センター(JICST)(現・国立研究開発法人科学技術振興機構(JST))へ変更になった。昭和49(1974)年からは『科学技術文献速報・化学・化学工業編(国内編)』と改題し、現在もWeb版(有料)として継続している。

国立国会図書館では本書のデジタル化作業が完了し、令和5(2023)年2月28日から国立国会図書館デジタルコレクションで公開を行っている(国立国会図書館内限定)。実際に『日本化学総覧』に目を通していただくと、真島博士ら編纂作業に携わった人々の偉功を実感し、また、当時の研究者らがどのようなことに関心を抱き、研究を行ってきたか、様々な観点から興味深く眺めることができるのではないだろうか。

展示会「スペイン語でつながる子どもの本—スペインと中南米から」関連講演

スペインと中南米の 子どもの本 —この100年の変遷と今—



©Kazuko Wakayama

国立国会図書館国際子ども図書館では、2022年10月4日（火）から12月25日（日）まで開催した展示会「スペイン語でつながる子どもの本—スペインと中南米から」の関連講演として、スペイン語圏の児童文学の翻訳で知られる宇野和美氏を講師にお迎えし、スペイン語圏の子どもの本を取り巻く状況などについてお話いただきました（YouTube 配信）。スペイン語圏の100年前から現代までの多彩な子どもの本のエピソードに満ちた講演の様子をダイジェストでお伝えします。—子どもの本は「多様な世界への窓」になっている。「分からなさ」や「違い」を怖がることはない—と講演は結ばれます。

（文責 本誌編集担当）

宇野 和美 氏

スペイン語翻訳家。1983年東京外国語大学外国語学部スペイン語学科卒業。出版社勤務を経て、2002年バルセロナ自治大学大学院文学教育科言語文学教育修士課程修了。2007年スペイン語の児童書を専門とするオンライン書店「ミランフ洋書店」を開店。訳書に『見知らぬ友』（福音館書店）、『おとなってこまっちゃう』（偕成社）、『むこう岸には』（ほるぶ出版）、『ちっちゃいさん』（講談社）他多数。著書に『まめつぶごぞうバトゥフェ スペイン・カタルーニャのむかしばなし』（BL出版）等。

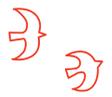


スペイン語圏の地図

1、スペイン語圏とは

スペイン語圏とは、スペインと中南米の約20か国と理解していただければと思います。

スペイン語圏のネイティブの話者は5億人と言われています。なぜ、このように中南米でスペイン語が話されるようになったのか、簡単に言うと、コロンブスがアメリカを発見してから、スペインが中南米の土地を植民地化していったという歴史があるためです。



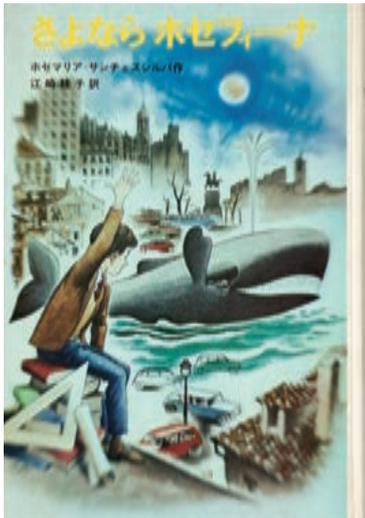
2、社会の動向と児童文学の発展―ス

ペインと中南米―

まずは1920年から1970年ぐら
いまでの状況を振り返ってみましょう。

スペインでは20世紀前半に第二共和政
と呼ばれる時代があり、その頃はちよう
ど児童雑誌の時代でした。その後、内戦
とそれに続く独裁により、民主的な文
化、児童雑誌で花開いたような文化が完
全に断絶してしまいますが、独裁政権が
1975年に終わり、そこから民主制に
移行していきます。

一方、中南米では、1960年頃から
ラテンアメリカ文学ブームが始まりま
す。ラテンアメリカはここで物語の時代
が始まったと言ってよいと思います。そ



『さよならホセフィーナ』
ホセマリア・サンチュエスシルバ 作
江崎桂子 訳 ロレンソ・ゴニ 絵
学研 1967 <請求記号 Y7-845 >

れ以前は詩が主流でした。しかし、一部
の国を除いて、中南米では出版が盛んで
はない国も多く、さらに、物語の時代が
来てからも、内戦や独裁などによる不安
定な政情から、文化が断絶してしまう状
況がありました。

今回、スペインと中南米の100年の
話をする際に、その前半の時代の作品で
日本において翻訳されたものにはどうい
うものがあるかを、まずお話ししたいと
思います。

20世紀の後半ぐらいいまでに日本でスペ
インの児童書として紹介された本として
は、『ドン・キホーテ』があります。も
ともと子どもの本ではなく、17世紀の文
学ですが、スペインには古典的な児童文
学がないので、1950年代、60年代に
日本で出版された世界児童文学全集のよ
うなものには、必ずという感じで『ドン・
キホーテ』が収録されました。

スペインの内戦時代、内戦後の独裁時
代に発表された作品の中では、国際アン
デルセン賞受賞者**ホセ・マリア・サンチュ
エスシルバ**の『**さよならホセフィーナ**』、
あるいは女性作家アナ・マリア・マトウー

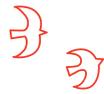
テの『きんいろ目のバツタ』などの作品
が翻訳されています。

スペインにおける1980年代という
のは、独裁が終わって、民主的な社会に
変わって、それまで検閲や言論統制でな
かなか発表できなかった作品が噴き出す
ように出てきた時代で、現代児童文学の
始まりと言ってよいと思います。読み物
が中心で、絵本はまだ高級品でした。

時を同じくして、80年代、90年代とい
うのは、中南米では児童書出版社が創業
した時代でした。

ベネズエラで1978年に創業したエ
カレという出版社は中南米に絵本文化を
もたらした記念碑的な出版社と言ってよ
いと思います。

その後、2000年以降は、インター
ネットの普及によって、デジタル化が進
みます。これはスペイン語圏の出版の中
では非常に大きな意味のある出来事とし
て。インターネットが普及するまで、紙
ベースものが動いていた時代というの
は、中南米の本は非常に手に入りにく
かったのですが、インターネットを通じ
てさまざまな情報が入ってくるとともに



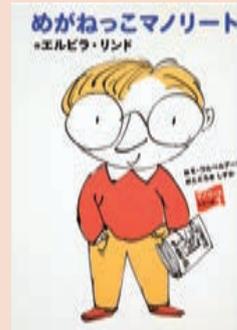


『ベラスケスの十字の謎』
エリアセル・カンシーノ 作
宇野和美 訳 徳間書店 2006
<請求記号 Y9-N06-H221>
スペインのベラスケスの有名な絵画「ラス・メニーナス」を題材にして描かれた物語です。



『最果てのサーガ 1』
リリアナ・ボドック 作 中川紀子 訳
PHP 研究所 2011
<請求記号 Y9-N11-J34>
中南米では非常に広く読まれたファンタジーです。中南米の歴史や風土に基づいて、古い世界から侵略者がやってくるという設定になっています。

スペインでは1980年代以降、言論統制から解放されて、熱気あふれる時代がありました。ちょうど日本の1950～60年代の、児童書が多く出てきた時代の熱気のようなものを思い浮かべていただければと思います。前の時代の反動のような作品が出版された後、1990年代に入ると、内戦や独裁から離れたいろいろなテーマの作品が出始めました。その一部と、中南米の読み物を紹介します。



『めがねっこマノリート』
エルビラ・リンド 作
エミリオ・ウルベルアーガ 絵
とどろきずか 訳 清水憲男 監修
小学館 2005
<請求記号 Y9-N05-H256>
スペインで100万部以上の大ベストセラーになった物語で、マドリドの下町に住む男の子、いたずらっ子のお話です。

絵本ブームが起こります。読み物が中心だったところに、絵本の楽しさを知る人たちがどんどん出版し始めたのがこの時代で、同じ頃に翻訳書も非常に増えました。また、児童書店も増え、スペイン語圏20か国ほどの中で、国境を越えて本づくりがなされる時代がやってきました。

3、現代スペイン語圏の子どもの本

私自身がスペイン語の本の翻訳をしようと思ったときに、20か国あればどの国にも子どもの本があるだろうと、楽観的に考えていたのです。

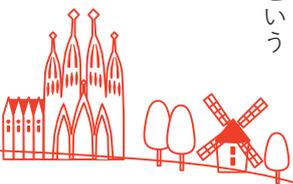
しかし、社会があれば子どもの本があるというわけではなく、本は平和で豊かな国に流通していくものだと感じるようになりました。人口が少ない国の場合、読む人が少なく、商業出版が成り立たない状況があったり、内乱や独裁政権など、いろいろな理由で本が出版できない事態も起きてきます。子どもの本は全体にまよばんなくあるわけではなく、偏った所にあるというのは頭に入れておくよよいと思います。

① 読み物と社会

子どもの本は、どんな本でも社会を反映している部分があり、特に読み物にはその部分が多いと思います。

たとえば、スペインの独裁の時代は、教育的価値が顕著に認められる本のみ出版すべし、出版社は民話や古典に題材を求め、英雄譚や道徳的なテーマを選ぶべし、という政府の通達があり、アンチヒーロー的な悪い子が出てくる本は出版されませんでした。悪い子が登場した本も最後には改心する、あるいは、家族の形も理想化された家族像が土台になっていて、社会批判は禁物で、ユーモアや空想、ナンセンスは無益なものとして捉えられていて、そのような本はなかなか出版できなかつたのです。

その反動から、その後はいろいろなテーマの、当時出せなかつた本も出てくるわけです。現在、読み物はエンターテインメントも含むあらゆるテーマの本が出ていると考えてよいと思います。中南米の児童文学を見たときに、暴力と貧困の影が非常に色濃く出ている作品が多いというのも一つの現象だと思えます。





『いっしょにかえろう』
 ハイロ・ブイトラゴ 文 ラファエル・ジョクテング 絵
 宇野和美 訳 岩崎書店 2018
 <請求記号 Y18-N18-L218 >



『ペドロの作文』
 アントニオ・スカルメタ 文 アルフォンソ・ルアーノ 絵
 宇野和美 訳 アリス館 2004
 <請求記号 Y9-N04-H169 >

②自分たちを表現する

「子どもの本は「鏡」であり「窓」である」、これはメキシコのエリサ・ボニージャという児童書の編集者だった方の言葉で、本というのは自分を表現するものであり、他者を見る「窓」にもなるということなのです。どんな国の児童書でもその国の様子とか独自のものを表現しようとする動きは必ずあり、1980年以降のスペイン語圏の児童書出版、とりわけ中南米を中心にした絵本の分野において、翻訳絵本ではなくて、自分たちの状況を自ら表現しようとする動きが非常に顕著になりました。

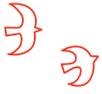
『ペドロの作文』の原書の出版年は1998年ですが、描いているのは1973年のチリの軍事クーデターの時代です。少年が小学校で「家族の夜の過ごし方」という作文を書けと言われます。この子の両親はいつもラジオを聴いていて、「ラジオを聴いている」と書いてよいのかどうか迷う少年の作文が扱われた絵本になっています。「作文を書かせる」ことが、軍部が反政府分子を暴き出す手段として用いられます。日本でも、シリ

アスで胸に迫る作品として、出版された頃によく読まれました。

次はコロンビアの現実を映している作品、『いっしょにかえろう』です。お話としては、おそらく内乱で父親を失った、母親と弟と暮らしている女の子が描かれています。毎日、学校が終わると弟を迎えに行き、お母さんが仕事場から帰ってくるまで弟の面倒を見、ご飯の支度をして家にいるという境遇の中、銅像のライオンが、おそらく空想の中で、一緒にいてくれることで、寂しさを抱えながらも心強く思っ生きていける、という内容になっています。

テキストだけ読んでみると、本当に何気ない話なんです。家にお母さんが帰ってきて、ライオンはどこかに去っていくのですが、最後に、親子が眠っているベッドの脇の写真立てに、ライオンのような容顔のお父さんの写真があるという場面で終わります。このとき、左側に新聞がちらっと見えていて、「1985年行方不明者」という文字がスペイン語で入っています。反政府ゲリラによって、この年に判事や市民を含む115人が犠牲に





『ちっちゃいさん』
イノール 作 宇野和美 訳 講談社 2016
<請求記号 Y18-N16-L126 >



『あくびばかりしていたおひめさま』
カルメン・ヒル 文 エレナ・オドリオゾーラ 絵
宇野和美 訳 光村教育図書 2009
<請求記号 Y18-N09-J255 >

なった最高裁占拠事件が下敷きになって
いることが、ここでちらりと匂わされて
います。文章ではハードなことは書いて
いないのですが、絵でコロンビアの現実
が描かれている作品です。

③ 枠にとられない表現と形式

ここでは、スペイン語圏の作家によっ
て作られた、英米の児童書と比較して非
常に特徴のある絵本を紹介したいと思っ
ます。

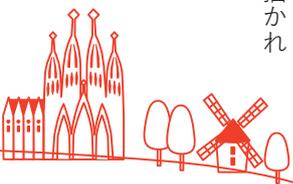
スペインの場合、内戦時代は外国から
の絵本がなかなか入らず、英米の児童書
の影響は限定的でした。日本であれば、
1950年代、60年代にたくさん英米
の絵本を読んで育った人も多いと思っ
ますが、そういうものが絵本文化の中
に入ってきていないようなのです。私たち
は絵本というと、大きさはこのくらいで、
ページ数は32ページくらいで、というの
が定型としてありますが、英米の絵本の
影響を受けず、そういうものにあまりこ
だわらずに、面白さを追求して、作品に
合わせて外側や体裁を作っていくという
人々がいます。

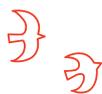
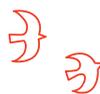
その一人目として、**エレナ・オドリオ
ソラ**（翻訳書ではオドリオゾーラと表記
されている）を紹介したいと思います。

1967年生まれのスเปนのイラスト
レーターです。この人は作りにこだわっ
た本をたくさん出版してきました。大変
面白い人で、非常に特徴のある絵を描く
人です。私は2018年にお会いする機
会があつていろいろ話したところ、自分
が表現したいものをすごく大事にする方
なんだな、とつくづく思いました。

次に紹介したいのが、アルゼンチンの
イノールという作家です。1972年生
まれで、メキシコの絵本コンクールに
募ったのがきっかけで絵本の世界に入
りました。

紹介したいのは『**ちっちゃいさん**』と
いう絵本です。「ちっちゃいさん」は「赤
ちゃん」のことで、まだ人間になりきれ
ていない赤ん坊、無限の生命力を持った
「ちっちゃいさん」が、だんだん大きく
なっていく様子を描いた作品です。母性
神話のようなものはまったくなく、ユニ
セックスな子育てが新しい視点で描かれ
ています。





次に紹介するのは、**グステイ**です。この人もアルゼンチンの人ですけれども、1963年生まれで、1970年代くらいからずっとスペインに住んでいます。

紹介したいのは『マルコとパパ ダウン症のあるむすことぼくのスケッチブック』で、次男のマルコが、ダウン症のある子として生まれてきたところから始まります。ダウン症であることを受け入れられない父親グステイが、その後マルコと長く毎日を過ごしていく間に、日記のように描くスケッチを基に構成した本になっています。この本が素晴らしいのは、最後には父であるグステイが、ダウン症のマルコを丸ごと受け止めるに至るところですが、毎日毎日いろんなことをして、行きつ戻りつしながら、日常と一緒に過ごす間に最後は受け入れていくというところがそのまま本になっているんです。

この本は145ページもあります。日本で絵本を作りましたよというときに、100ページもあるような絵本は作られないのではないかと思うのですが、いろんなことがあって、その末に受け入れられるようになるまでの段階をたっぷりと見せ

てしまうという本づくりはすごいなあと思っています。

④ 国境を越えて広がる

読み物は、社会に根差している作品が多く、国境を越えるのが難しいのですが、絵本は、メキシコに住んでいようがアルゼンチンに住んでいようがコロンビアに住んでいようが、例えば、スペインの編集者と仕事をすることができます。

スペイン語圏は言葉の垣根がないので、2000年以降、非常にそれが活発に行われています。スペイン語圏内で出版社が主催する絵本コンクールがあったり、スペイン語で出版された本を対象にした賞、どこの国ではなく全体を対象にした賞などもあったりして、国を越えて切磋琢磨している印象があります。また、あまり出版産業が発達していない国で生まれたイラストレーターが、ほかの国へ行って活躍する可能性も非常に高く、自国にこだわらず活躍している人もたくさんいると思います。

ここで紹介するのは『カピバラがやってきた』という、ウルグアイの作家の作

品です。カピバラの一家は、猟師に狙われる季節に、川辺にある鶏小屋に逃げ込みます。最初は鶏たちが拒絶するんです。けれども、ある事件をきっかけにして、鶏とカピバラが仲良くなっていった、お互いに助け合うようになっていく。最後が、ちょっと思いがけない終わり方をするお話です。

カピバラが描かれています。元からいた人々の所に他所から移民や難民が入ってきて、両者の関係性がいろいろ変わっていく、という今の世界の状況をなぞらえていると捉えることもできます。そう考えると非常に社会派の絵本です。

原書の出版社はエカレ社です。先ほど1978年に創業されたベネズエラの出版社と言いましたが、実は、2000年ぐらいからスペインのバルセロナに拠点を一つもって、そこで出版活動を展開しています。ベネズエラは今、非常に政治情勢が不安定になっていて、そこで本を作って、流通させるといのは非常に難しいので、エカレ社はバルセロナに拠点をもち、今も出版活動を非常に活発に続けることができます。また、





『カピバラがやってきた』
アルフレド・ソデルギット さく
あみのまきこ やく 岩崎書店 2022
<請求記号 Y18-N22-M256 >



『マルコとパパ』
ダウン症のあるむすことぼくのスケッチブック』
グスティ 作・絵 宇野和美 訳
偕成社 2018
<請求記号 Y1-N18-L60 >

エカレ社は数年前から、スペインの絵本出版社のグループを作り、協力しあいながら良い本を出そうと大きな働きをしています。

まとめにかえて

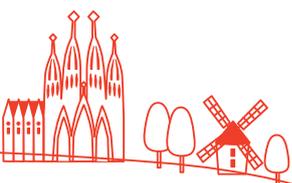
子どもの本は「多様な世界への窓」になっていると思います。私自身も翻訳していろんな原書を読む中で、たくさんのかたちを学んで、たくさんのかたちをもらってきました。

本というのは消費されるもの、たくさん売れるものを狙って作られることが多いのですが、消費の対象としてではなく関心の対象として、いろんな本を手にとってもらえるとよいな、と思っています。そのときに「分からない」や「違い」を怖がることはないよ、ということなんです。なんだかよく分からないことはいくらでもあると思うんですね。けれど、別にすぐ分からなくてもいい、知らなければ理解できないので、手に取ってくれたらいいんじゃないかな。文学的にも芸術的にも、表現の仕方などが非常に優れた本というのは、読む者に何かしら残して

いくものだと思うので、手に取ってほしいです。

また、子どもと本をつなぐ立場にあるような方は、ぜひとも子どもの読者にスペイン語圏の本も届けていただければと願っています。

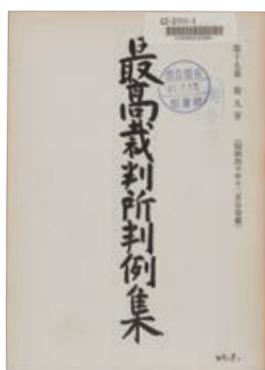
宇野先生はこのほかにも、日本で紹介されていないスペイン語圏の絵本や、それらを生んだ社会背景などにも触れてくださいました。英米の絵本とはまた違った特徴を持つ絵本の数々に魅了されたひと時でした。



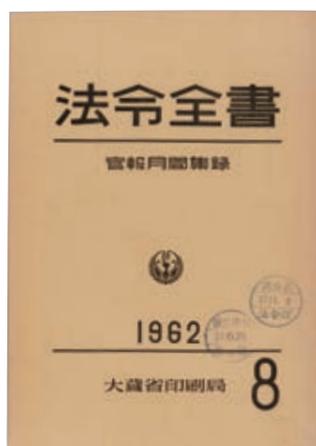
法令議会資料 いま・むかし

— 調査方法の変遷 —

三浦 修



『最高裁判所判例集』19(9)
(民事共)昭和40(1965)年
<CZ-2711-1>



『法令全書』昭和37(1962)年8月
<CZ-4-1>



『官報』11866号 昭和41(1966)年7月4日
<CZ-2-2>

図1 さまざまな法令資料

国立国会図書館では、法令や議会に関する資料を重点的に収集しており、それらを法令議会資料と呼んでいます。一般の方にはなじみが薄いかも知れませんが、日本で言えば、代表的なものとして、法令等の条文を掲載する「官報」・「法令全書」、裁判所の判例を掲載する各種の「判例集」などの法令資料(図1)・国会や地方議会の審議の記録である「会議録」、審議の対象となる「議案類」などの議会資料(図2)があり、当館議会官庁資料室で所蔵しています。それらの多くは、国や地方公共団体の諸機関により作成されるもので、法律の公布やその制定過程の記録といった、国民の権利・義務に直接関係のある重要な資料であるにもかかわらず、通常の流通ルートに乗ることが少なく、かつては一般の方には入手が困難でした。また所蔵する機関が限られるために、探している資料の有無を文書や電話で問い合わせるか、直接訪問して調査しなければならぬなど、インターネットを通じて、公の機関の情報が発信され、流通するようになった現在と比べると、アクセスするには多くの制約がありました。

紙媒体の資料については、現在もなおその状況が続いていると言えますが、21世紀初頭以降、日本においてもインターネット環境の整備が進み、図書館等の資料の所蔵情報のみ

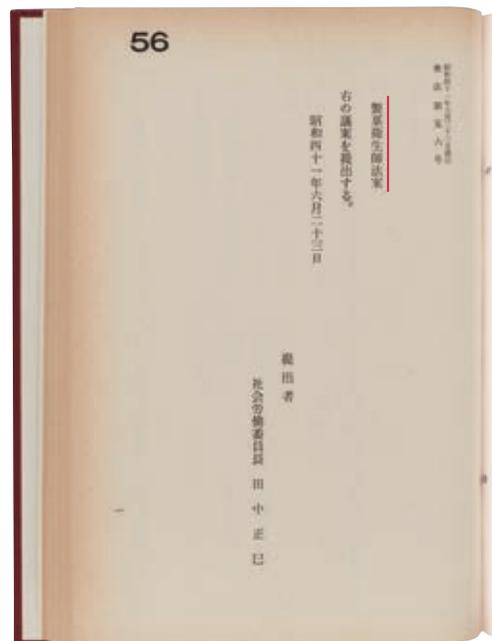
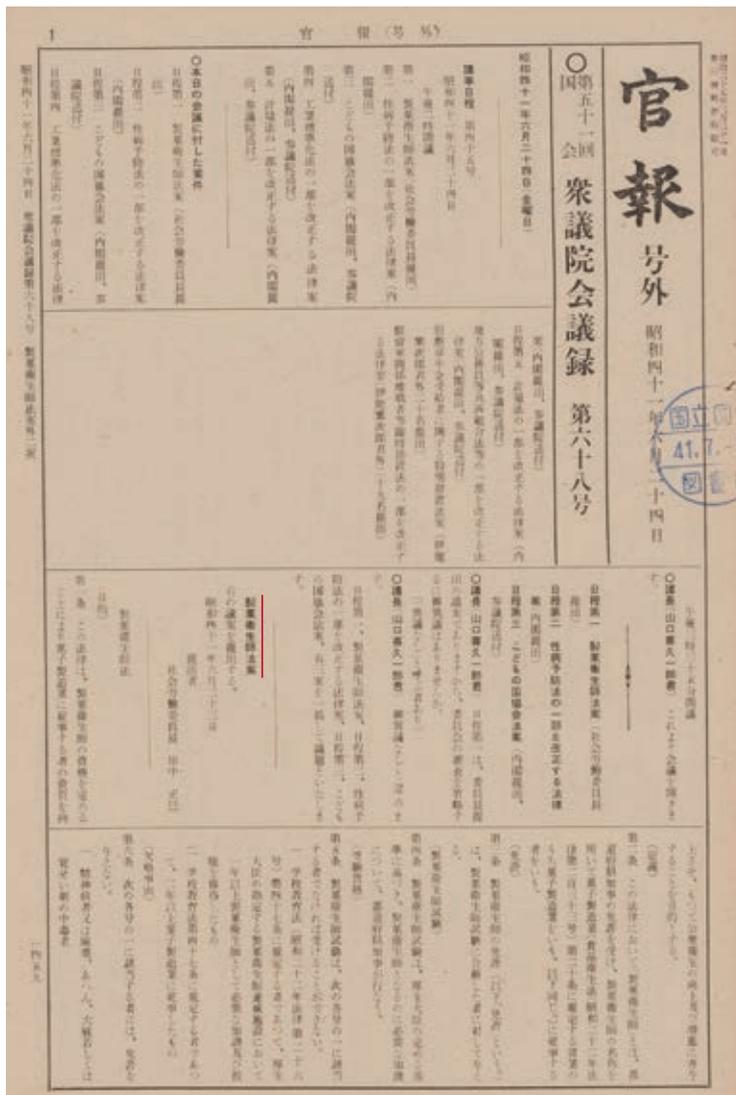


図2 議会資料の一例 製菓衛生師法案の審議の記録
 (右)「製菓衛生師法案」第51回国会衆議第56号 提出日：昭和41(1966)年6月23日 <BZ-4-01>
 (左)「第51回国会衆議院会議録第68号(官報号外)」昭和41(1966)年6月24日 <BZ-6-13>

ならず、資料の画像や本文そのものを直接見られるデータベースが提供されるようになってきました。そうしたサービスの展開は、分野を問わず進められているのですが、法令議会資料の分野においては、特に顕著に見えます。

それは、これまで紙媒体で情報を公表していた国や地方公共団体の諸機関が自らウェブサイトで情報を発信し、資料を所蔵する機関がデジタル化した資料を公開することにより、インターネット上に多くの基本的な資料・情報が提供されるようになってきているためです。また、従来の紙媒体の目録類では、検索に使えるキーワードが、資料のタイトルや著者名などに限定されていましたが、現在提供されているデータベースでは、本文の全文検索ができるものもあり、手持ちの情報が限られていても、必要な情報にたどり着きやすくなっています。その状況は海外においても同様であり、現在ではインターネット環境さえあれば、多くの国内外の法令議会資料・情報にアクセスできるようになってきています。

具体的な調査方法の変化

インターネット普及以前～1997（平成9）年時点の調べ方～

高齢社会対策基本法 平 7.11.15 法 129…………… 529
同法の施行期日を定める政令
7.12.15 政 415…………… 529
高齢者、身体障害者等が円滑に利用できる特定建築物の
建築の促進に関する法律

索引から法律名を探す

建築再整備特別措置法第十三条第一項の職業転換給付
金に関する政令 昭51. 6.28 政 166→ K 25
高齢社会対策基本法
平 7.11.15 法 129(国 134)
同法の施行期日を定める政令 平 7.12.15 政 415

法律「高齢社会対策基本法」の部分

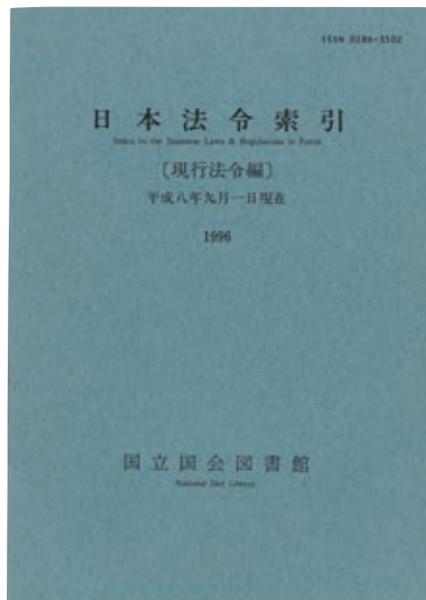


図3 『日本法令索引』現行法令編，平成8（1996）年，1997<CZ-1-1> 年刊版の現行法令の索引。平成14年版まで刊行。

審議された国会の回次を特定する
審議された国会の回次を知るために、まずこの法律が制定された時期を調べます。最新の総合法令集、例えば「現行日本法規（ぎょうせい）」へ請求記号 CZ・3・7V（全100巻）の、五十音索引で調べると、この法律は「第75巻 労働」に収録されており、掲載箇所を確認すると、平成7年11月15日に公布されたことが分かります。
法令の制定とその改廃経過を調べるには、当館が昭和24年以降平成14年まで作成していた「日本法令索引」へ請求記号 CZ・1・1V（図3）が便利です。平成7年11月15

Q 「高齢社会対策基本法」の審議過程を調べたい。
インターネット普及以前と、現在の法令調査資料の調査方法の変化を、具体的な例で見たい。国会における審議の経過を調べるには、審議された国会の会議録を見ることがあります。会議録の目次・索引は衆議院・参議院、本会議・委員会、国会の回次ごとに作成されます。審議経過を知るためには、その法律が審議された国会の回次、本会議や委員会などを特定し、審議された本会議、委員会の掲載会議録の号数や頁を確認する必要があります。

日以降に刊行された「日本法令索引」（この場合平成8年版以降）の五十音索引でこの法律を調べると、「高齢社会対策基本法 7・11・15 法129（国134）」と記載されており、このうち「（国134）」の箇所が成立時の国会の回次を示しています。つまり、第134回国会（会期：平成7年9月29日～12月15日）で成立したことが分かります。

審議された委員会・本会議を調べる

審議された委員会・本会議を知るためには、国会審議全体の経過が回次ごとに記録されている「議案審議表（参議院議事部）」へ請求記号 BZ・5・4ⅴが便利です。第134回国会の「議案審議表」を調べると、この法律の原案は「高齢社会対策基本法案」（第132回国会参議院議員提出法律案第6号）であり、提出者が参議院国民生活に関する調査会長であることが分かります。

提出されて以降成立するまでの、第132回国会（平成7年1月20日～6月18日）、第133回国会（平成7年8月4～8日）、第134回国会の「議案審議表」を調べて、衆参の本会議や委員会の目次・索引を確認し、会議録の掲載号数や頁を特定して見ていくことにより、この法律案の審議全体の流れが確認できます。

すなわち、第132回国会において、参議院国民生活に関する調査会が法律案を起草し、参議院本会議で可決ののち、衆議院に送付されますが、衆議院では第132回国会、第133回国会と継続審査とされ、第134回国会で衆議院内閣委員会及び本会議で可決します。第132回国会閉会後の参議院議員通常選挙により、同院議員の半数が改選されているため、再び参議院に送付され、内閣委員会及び本会議で可決、成立となっています。提出時法律案は、第132回国会参議院国民生活に関する調査会会議録第3号2～3頁などのべ6件の会議録に掲載されており、原案どおり成立しています。



議会官庁資料室カウンター（東京本館）でも、調べ方に関する質問に対応しています。

現在の調べ方

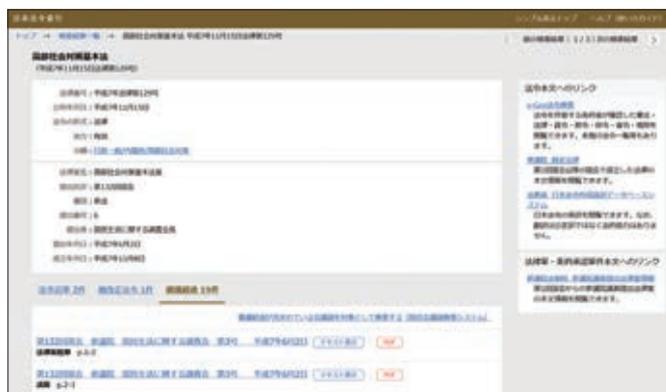


図4 日本法令索引 <https://hourei.ndl.go.jp> 明治19年2月の公文式（こうぶんしき）施行以後の法令とその改廃経過、帝国議会以来の法律案及びその審議経過等が参照できる。左は「高齢社会対策基本法」の項



図5 国会会議録検索システム <https://kokkai.ndl.go.jp> 第1回国会（昭和22年5月開会）以降の国会会議録を検索・閲覧することができる。左は第134回国会衆議院内閣委員会議録第3号「高齢社会対策基本法案」

国立国会図書館ホームページで平成16年から提供しているデータベース「日本法令索引」（図4）で、法令とその改廃経過、法律案及びその審議経過等を調べることができます。法律名「高齢社会対策基本法」で検索すると、前頁で順を追って調べた情報、すなわち法律の公布日、成立した国会の回次、元になった法律案の提出や審議に関する情報を即時に得ることができます。

画面右上の「法令本文へのリンク」により、現行の条文、制定時の条文、「法律案・条約承認案件本文へのリンク」により、提出時の法律案本文を見ることができます。

同様に当館ホームページで平成11年から提供しているデータベース「国会会議録検索システム」（図5）では、第1回国会以降の国会の本会議・委員会等の会議録を検索・閲覧することができます。「日本法令索引」の審議経過タブのリンクから、審議の段階ごとに会議録を追っていくことができます。

情報探索に求められること



図7 レファレンス協同データベース「Q. 1975～2018年の全国の市町村の議員定数分かる資料(図書・逐次刊行物)があるか。」という質問への回答が記されている。レファレンス協同データベース <https://crd.ndl.go.jp/reference/>



図6 リサーチ・ナビ 日本 - 議会資料 (国会) <https://rnavi.ndl.go.jp/jp/index.html> リサーチ・ナビ > 議会・法令・判例・官庁資料 > 日本 - 議会資料 (国会)

このように、ウェブサイトを介して情報を入手する環境の整備や、提供される情報の対象範囲の拡大はますます進み、法令議会資料・情報へのアクセスの利便性は、格段に向上してきています。しかし現状では、検索エンジンだけで誰でも目的とする情報にたどり着くことができる、という段階には至っていません。ウェブサイトに存在する情報でも、データベースに含まれる一つ一つのデータ等の「深層Web」と呼ばれる情報は、然るべき入口から、適切な検索語を用いて調べないと、求めるデータに到達することができません。

これは法令議会資料の分野に限ったことではありませんが、それぞれの情報源の収録対象や範囲、何の項目から調べられるのか、検索の結果として得られるのが所在情報なのか資料そのものなのか、そういったことを整理・把握しておくことが必要となります。現在の情報探索においても、数多くの情報源の中から、その場合にもっとも適切なものを選択し、効率の良い検索を行う、これは紙媒体の資料のみを用いていた時期と、何ら変わるところはありません。

当館では、「リサーチ・ナビ」(図6)で、調べものに役立つ資料や調べ方に関する情報を、また全国の図書館等と協同して構築して

いる「レファレンス協同データベース」(図7)で、レファレンス事例や調べ方マニュアルなどを提供しています。両者は、数多くの関係者の累年にわたる知識と経験が蓄積された、資料・情報の効率の良い調べ方についてのデータベースとなっています。

当面は、ウェブ情報だけで十分とはならず、従来の資料を併用していく期間が続くでしょう。求めるものが、ウェブのみで充分なのか否かを判断するには、従来の資料やその背景にある制度に関する知識が不可欠です。当館やその提供するコンテンツが、今後も情報探索のよりよい伴走者であることを願うものです。

*ここに示す調べ方は、あくまでも一例です。
*注記のない<>内は資料の当館請求記号です。
*インターネット最終アクセス日は2023年2月22日です。

未来の国立国会図書館 職員を迎えるために



国立国会図書館の未来を担う職員を採用するため、毎年欠かすことなく実施している採用試験。この採用試験を成功させることが、私が所属する総務部人事課任用係の大きな使命の一つです。そんな任用係にとって最大の危機が3年前、新人職員として私が配属された初日に訪れました。新型コロナウイルスに伴う緊急事態宣言を受け、試験の延期が決まったのです。こうして私の任用係人生は困難ともいめでたく(?)幕をあげました。

最初にして最大の壁は、筆記試験の会場の確保でした。借用可能な外部会場は見当たらず、様々な案を検討した結果、十数年ぶりに当館内で実施することにしました。ただ、受験者約1000人分の座席を確保するためには、職員が普段使っている会議室だけでは到底足りません。資料閲覧のためのエリアや利用者が少し休憩するような場所も含め、館内で試験室として使えるようなスペースを探し、広さを測って収容人数を計算しました。当時まだどこに何があるのか把握しきれていない私は、広い館内で迷子になりながらも必死に歩き回ったのを覚えています。

次なる壁は面接試験でした。館内の感染拡大を防ぐため、従来の対面方式ではなくオンラインでの面接を一部導入することにしました。当時はまだ普及したばかりで、こちらも手探りの状態でしたが、当日の流れの確認や接続トラブルが起きた際のコミュニケーションを何度も行い、入念に準備しました。面接当日は、無事終えることができるか、自分が受験者として面接を受けたときと同じくらい緊張していたのを今でも思い出します。

こうした準備のおかげで、任用係最大の危機であり、私にとって最初の大仕事であった採用試験を無事乗り切ることができました。この年に限らず、昨年は外部会場での筆記試験を再開したり、今年度は受験申込みのオンライン化を行ったりと、当館を取り巻く社会情勢に合わせて毎年少しずつ手法を変えながら、試験を実施しています。大変な仕事ですが、新人職員のやる気に満ちた笑顔を見ることができたときは、当館の未来を創る仕事をしているんだなと実感します。今後も、当館の未来のため毎年新しい職員を迎えられるようまい進していきます。

さて、ここまでお読みくださり我こそはと思われた皆様、今年の受付は終了しましたが、来年度以降の受験申込みを心よりお待ちしております。

(人事課任用係 春巻き太郎)

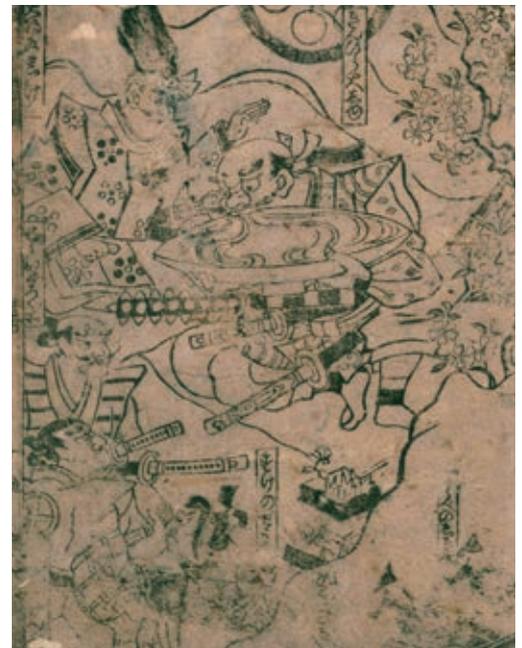
江戸時代の大酒飲み、大食い

川本 勉

2 『北斎漫画』10編 27丁表
「無藝大食」と題し、蕎麦の大食いが描かれている。
『北斎漫画』10編 葛飾北斎 著 芸艸堂 1962年 1814-1878年刊行の複製
<請求記号 721.8-Ka723h3 >



3 『浮世畫譜』2編 17丁表
「大食」と題し、蕎麦の大食いが描かれている。
『浮世畫譜』2-3編 浜斎英泉、歌川広重 筆
片野東四郎 [18-] 2冊 (合1冊) <請求記号
181-122 >



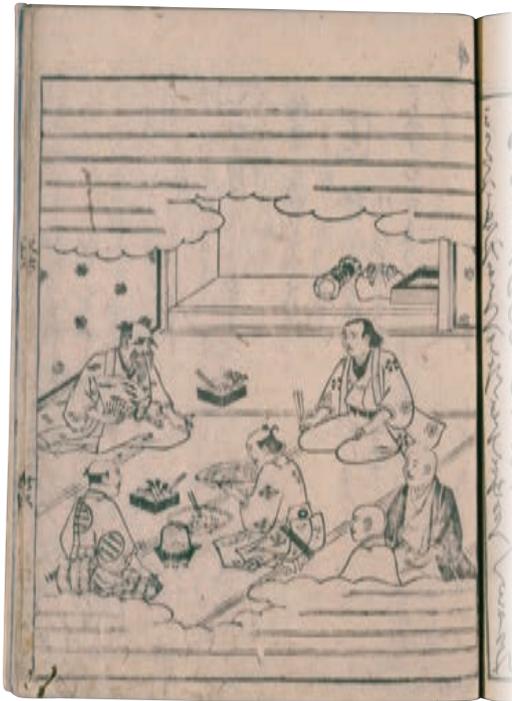
1 『金平大酒論』9丁表
「さんひら大しゅ」とあり、大盃で酒を飲む金平が描かれている。
『金平大酒論』 [寛文年間] 1冊
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2541947/1/11>

大食いを競うイベントやテレビ番組、また、完食者は料金がただになる飲食店の企画などは、現代でもよく知られているが、江戸時代では行司を立てて酒、飯、菓子、蕎麦など飲食の量を競う催し（闘飲、闘食または大酒大食会）が、しばしば行われていた。浄瑠璃本の『金平大酒論』(1)には、坂田金時の一子で、正義感が強く豪放磊落で知られた兵庫守金平が、大盃で大酒を飲む様子が描かれ、絵手本として知られる葛飾北斎の『北斎漫画』(2)や、浜斎英泉の『浮世畫譜』(3)には、蕎麦を山のように平らげる大食の様子が描かれている。

ここでは、当館が所蔵する版本、写本を中心に、江戸時代の大酒飲み、大食いについて書かれた資料を虚実ともに取り上げ、その真相や人々の関心の度合いを探ってみたい。

水鳥記

『水鳥記 3巻』 地黄坊樽次 著 松會 [江戸前期] 3冊(合1冊) 榊原芳野旧蔵
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2533768>



4 『水鳥記』松会版下巻 36丁表
池上邸内における大蛇丸底深(中央左 髭を垂らして右手に開いた扇子を持つ老人)と対座する地黄坊樽次(中央右 総髪で右手に閉じた扇子を持つ男)。画は無記名だが、浮世絵の祖と称される菱川師宣か。

写本の他に、版本が京都で寛文七年に刊行されたが、最も普及したのは刊年不明で、江戸で刊行された松会版である。京都版と松会版を比べてみると、字句の異同が多く見られるが、記載内容はほぼ同じである。なお、松会版は流麗な文章だが、文章の切れ目が分りにくく、若干読みづらいのに対して、京都版は字間、行間が広く、文章の切れ目に句点もあり読みやすい。また、松会版の優美な挿絵は、菱川師宣の筆と思われるが、京都版では挿絵の数こそ松会版より多いものの、絵師は不明で、その絵もやや稚拙な感を否めない。

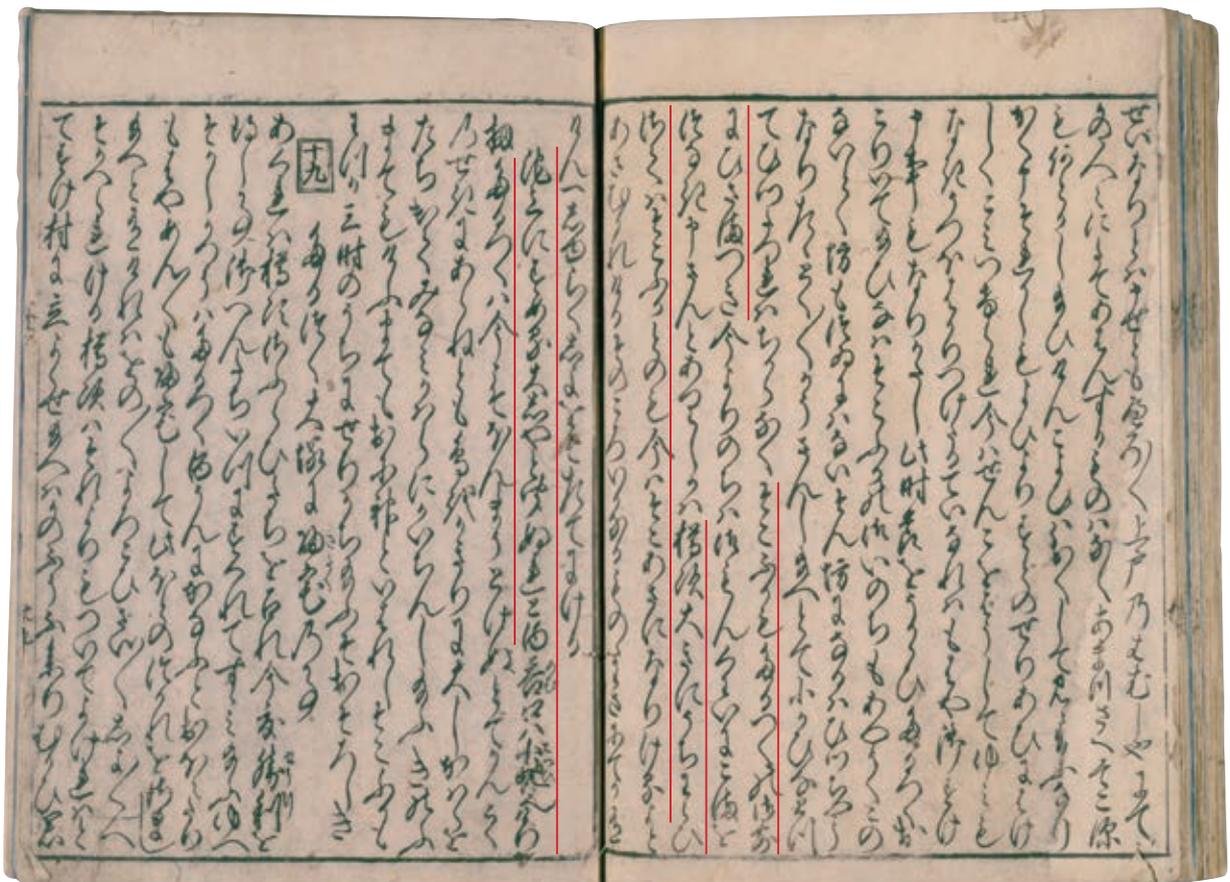
水鳥とは「酒」の字を分解し、偏へんのさんずい「シ」||「水」と旁つくりの「酉」||「鳥」を組み合わせた言葉で、酒の異称であったり酒好き(上戸)のことをいう。従って表題の『水鳥記』とは、名だたる上戸たちの物語といった意味。

慶安元(一六四八)年秋、武州大師河原で実際に行われた、地黄坊樽次(上野国厩橋藩主酒井雅楽守忠清の侍医で茨木春朔と称す)を大将とする水鳥たちと、大蛇丸底深(大師河原の名主で池上太郎右衛門幸広と称す)(4)を大将とする水鳥たちとの酒の飲み比べ(酒合戦、闘飲)の様子を樽次自らが戯作化し、愉快に紹介した実録風物語である。樽次側の水鳥たちは鎌倉の甚鉄坊常赤、赤坂の毛蔵坊鉢吞、蔵の半斎坊教吞、平塚の来見坊樽持、江戸舟町の鈴木半兵衛飲勝、浅草の木下李兵衛尉飯嫌、富坂の三浦新之丞權明、南河原の名主、斎藤伝左衛門忠吞、山家の喜太郎醒安など一七人、底深側の水鳥たちは底深の惣領長吉底成、舎弟の池上七左衛門底安、池上左太郎底無、種荷新田の名主、石渡四郎兵衛底広、田中内徳坊吞久、朝腹九郎左衛門桶吞、竹野小太郎盃吞など一五人であった。ち

なみに、權明、底無などというのは、大酒飲みの師匠が、酒好きの門下生に与えた雅号(水鳥名)。十二樽を軽く飲み干した甚鉄坊をはじめ、毛蔵坊や内徳坊などが、まさに合戦のように生死を賭けて奮戦した。この合戦の結末は、双方共倒れになるくらい酒を飲み干したが、最後には底深が降参し、樽次が勝利を収めた(5)。なお、本書には、各人がどのくらい酒を飲み干したかといった、具体的な酒量に関する記載がほとんどない。

戦国の血生臭い戦いに明け暮れた世から、太平を謳歌する世に変わり、武器を捨て鉢子や盃を用いた酒合戦は、人々の関心の的となった。まず当時の様子を記した写本が流布し、やがてその人気にあやかっただけでなく、京都や江戸の書肆がそれぞれ挿絵入り版本を刊行した。

戯作者の山東京伝は、江戸初期の人物や巷説などを考証した『近世奇跡考』の中で「地黄坊樽次酒戦」と題して、大師河原の酒合戦を挿絵入りで紹介(6)している。他に、国学者の喜多村信節が江戸の風俗、習慣などを体系的に整理し百科事典的にまとめた『嬉遊笑覧』や、江戸の町名主で考証家の斎藤月岑が、事件



5 『水鳥記』松会版下巻 38丁裏～39丁表

合戦は樽次側の勝利で終わった。「そこふかもたるつくの御前にひさまつき……樽次大きにうちわらひさてハそふかとのも今ハそあさになりけるよ……たるつく今こそほんまうとけ……」と、また当時の落書に「池上にすめる大しゃと聞ぬれと呑香口ノ小蛇也けり」とそれぞれ記されている。



6 『近世奇跡考』巻之5 16丁裏～17丁表

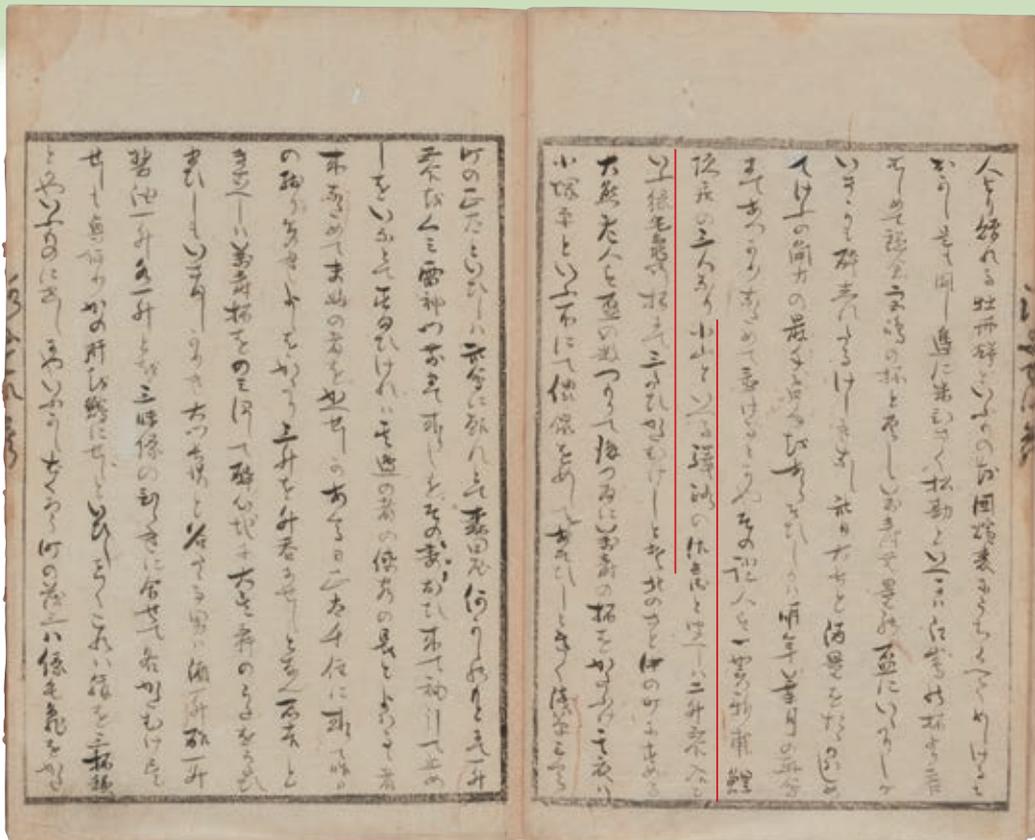
「酒合戦図」。「そこふか」「たるつく」「ちんてつ」らが描かれ、当時の酒合戦（闘飲）の様子が分かる。画は谷文晁の門下で南画家、挿絵画家の喜多武清。

『近世奇跡考5巻』山東京伝著 喜多武清画 大坂屋茂吉[ほか3名] [江戸後期] 2冊(合1冊) 榊原芳野旧蔵 <https://dl.ndl.go.jp/pid/2533765/1/87>

※巻之5 13丁裏～17丁裏に、大師河原の酒合戦についての記載がある。

風俗などを年表形式でまとめた『武江年表』³などの資料にも、この酒合戦についての記載がある。大師河原の酒合戦は、江戸時代の大酒飲みについて語るうえで、後世の文化人などに大きな影響を与えた見逃せない出来事であった。

高陽闘飲



7 『高陽闘飲』3丁裏～4丁表
 「小山といへる驛路の佐兵衛と聞へしハ二升五合入ルといふ緑毛亀乃杯にて三たひかたむけしとそ」とその酒豪ぶりが記されている。

『高陽闘飲』 大田南畝 著 歌川季勝 画 天保9[1838] 写 1冊<請求記号 244-252 >

「高陽」とは、河南省高陽里の儒者、鄭食其が、儒者嫌いの沛公（後の漢の高祖）に会見を断られた折、「われは高陽の酒徒、儒者にあらず」といって詰め寄った故事を指し、「高陽闘飲」とは、豪放な大酒飲みたちによる酒合戦といった意味。また、別書名を『後水鳥記』といい、

分を問わず参加、江戸近在の酒豪たち一〇〇余名が二組に分かれ、左右から一人ずつ出て杯を重ねて、酒量を競い合った。緑毛亀杯（二升五合）人、丹頂鶴杯（三升）など六種類の大杯が使用され、かすみ、さざれ梅、蟹、焼き鳥などが肴として供された。

こちらは前述の大師河原の酒合戦の故事にちなむ。文化一二（一八一五）年一月二日、江戸北郊千住の飛脚問屋の主人、中屋六右衛門（略称、中六）の還暦を祝って催された酒合戦の模様を、後に漢詩人で戯作者の大田南畝（狂名、蜀山人）が書き記した実録である。

参加者の主な飲酒量は、新吉原の伊勢屋言慶（六二歳）が三升五合、掃部宿の農夫市兵衛が四升五合、千住の米屋、松勘が三升七合、松勘と酒量を競った大長（大坂屋長兵衛）が四升、下野小山の佐兵衛が七升五合（7）、会津の旅人河田某が六升二合、菊屋のおすみが二升五合で、鵬斎や文晁も一升二合以上を飲み干した。酒量を記録していたのは、狂歌師で王子権現の神職であった平秩東作（二世）。参加者たちは終日静かで礼儀を失わず、また、見物客にまで酒が振る舞われ大盛況の内に終わった（8）。

千住の酒合戦といわれ評判となったこの酒の飲み比べ大会は、千住の商人で酒好きの絵師、山崎鯉隠が仕切り、会場となった中六の隠家には、漢詩人の亀田鵬斎、画家の谷文晁、酒井抱一など当時を代表する文化人が招集され、審判として立ち会った。会場入り口には「不許悪客下戸理屈入菴」（腹立上戸、眠り上戸、泣き上戸、理屈上戸などの悪客、下戸は参加できない）と南畝が書いた看板が掲げられた。

外神田御成道で書肆を営んでいた藤岡屋由蔵の手記である『藤岡屋日記』や、国学者で蔵書家として知られた高田与清（小山田与清）の考証随筆『擁書漫筆』（9）中には、『高陽闘飲』とほぼ同内容の記載の他に、掃部宿の下戸、八兵衛が老若男女が、武士や農民、町人など身

写本を当館以外では、東京大学附属図書館が所蔵。亀田鵬斎の序、大窪詩仏と市河寛斎の跋文を収載。大田南畝の随筆『一話一言』巻38にも収録されている。なお、酒宴の有様を詳しく描いた『高陽闘飲図巻』をニューヨーク公立図書館などが所蔵、また、『酒戦会番付』（1枚刷り）なる資料も現存する。



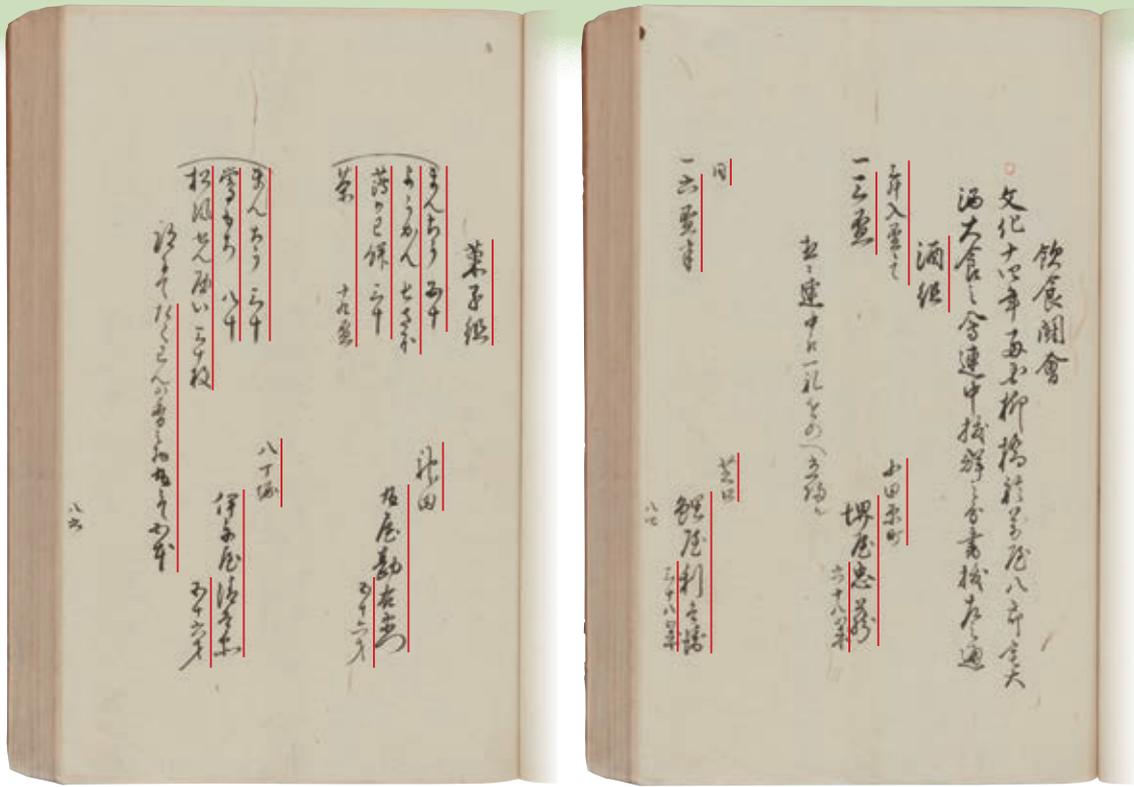
8 『高陽闘飲』10丁裏～11丁表
酒を振る舞われた見物人たちの様子が描かれている。



9 『擁書漫筆』巻第3の24 32丁裏～33丁表
江戸後期の土佐派の画家、高島千春が描いた「千住酒戦の圖」。
『擁書漫筆4巻』 高田与清(小山田与清) 著 伊勢屋忠右衛門[ほか2名]
文化14[1817] 5冊<請求記号142-98>
巻第3の24 31丁表～35丁裏「水鳥記のさだ」に、「千住酒戦記」の記載がある。

饅頭を九九個食べたという大食いの様子も記されている。また、珍籍収集家で雑学者の石塚豊芥子は、市井の見聞を集めた『街談文々集要』⁽⁶⁾中で、肥前国平戸藩主、松浦静山も随筆『甲子夜話』⁽⁷⁾中でそれぞれこの酒合戦の模様を紹介している。

視聴草



(右) 10 『視聴草』第18冊3集之6 84丁表
「飲食開會」酒組の堺屋忠蔵、鯉屋利兵衛の飲んだ酒の量が記されている。

『視聴草』第18冊 宮崎成身編
写 1冊<請求記号 129-159 >

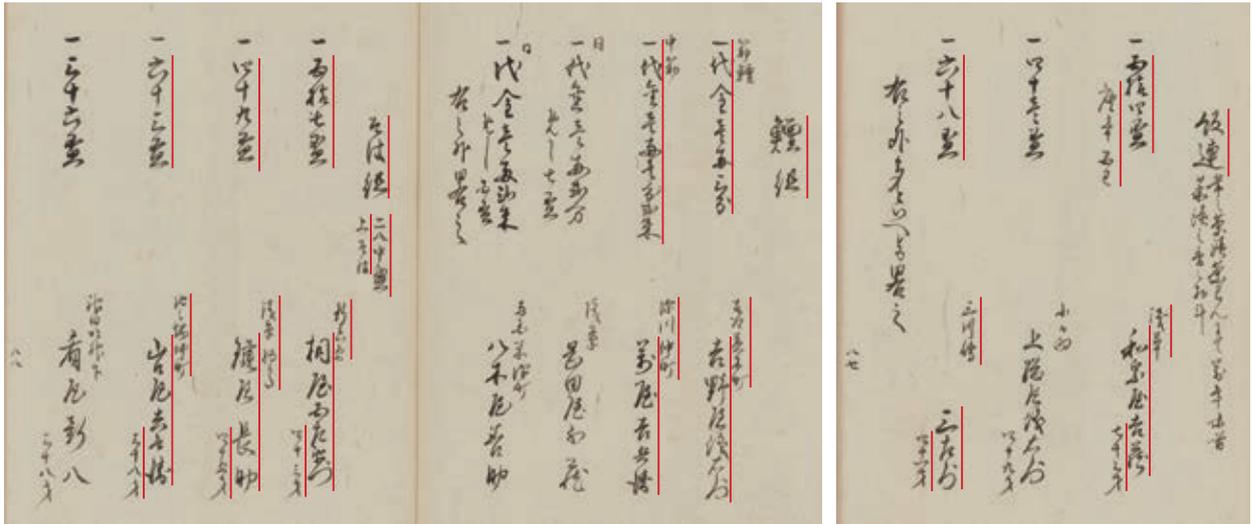
(左) 11 『視聴草』第18冊3集之6 86丁表
菓子組の丸屋勘右衛門、伊与屋清兵衛の食べた量が記されている。

写本を当館以外では、国立公文書館などが所蔵。

幕臣の宮崎成身が、文政一三(一八三〇)年頃から三〇年以上にわたりに見聞した、事件、災害、奇譚などを書き留めたもの。その中に、文化一四(一八一七)年三月、両国柳橋の料亭、萬屋八郎(八郎兵衛とも)が主人の萬八楼で、店の宣伝を兼ねて行われた、大酒大食会(鬪飲、鬪食)についての記載がある。それによると、千住の酒合戦と同様に、身分に関係なく農民、商人、武士など二〇〇人余りが、酒組、菓子組、飯連、鱧(鱧)組、そば(蕎麦)組に分かれて大酒大食が競われた。

酒組では、小田原町の堺屋忠蔵(六八歳)が三升入り盃にて三盃、芝口の鯉屋利兵衛(三八歳)が同じく三升入り盃にて六盃半(10)、本所石原町の美濃屋儀兵衛(五一歳)が五合入り盃にて一二盃など、菓子組では、神田の丸屋勘右衛門(五六歳)がまんじゅう五〇、ようかん七さお、薄かわ餅三〇、茶一九盃、八丁堀の伊与屋清兵衛(五六歳、六五歳とも)がまんじゅう三〇、鶯もち八〇、松風せんべい三〇枚、たくわん五本(11)、麴町の佐野屋彦四郎(二八歳)が米まんじゅう五〇、鹿の子餅一〇〇、茶五盃など、飯連(茶漬け茶碗を用い、萬年味噌と菜漬けの香の物添え)では、浅草の和泉屋吉蔵(七三歳)が五四盃、唐辛子五把、三川嶋の三左衛門(四一歳)が六八盃(12)など、鱧組では鱧を食べた金額で競い、本郷春木町の吉野屋儀右衛門(幾右衛門とも)が代金壹両三分、深川仲町の萬屋吉兵衛が代金壹両分式朱など、そば組(二八中盛、上そば)は新吉原の桐屋五左衛門(惣左衛門とも、四三歳)が五七盃、浅草駒形の鍵屋長助(七助とも、四五歳)が四九盃、池之端仲町の山口屋吉兵衛(三八歳)が六三盃(13)などであった。

この大酒大食会の模様は、『藤岡屋日記』や読本作者の曲亭馬琴ら好事家が持ち寄った珍説、奇聞などをまとめた『兎園小説』の他に、文化・文政期の見聞、虚譚などを集めた『文化秘筆』などでも紹介されている。また、谷文晁に師事し、大和絵などを得意とした榊原文翠が、明治四一(一九〇八)年に描いた『大酒大食会絵巻』は、この萬八楼の大酒大食会を描いたものとして知られる。



(右) 12 『視聴草』第18冊3集之6 87丁表
飯連の和泉屋古蔵、三川嶋の三左衛門などの食べた量が記されている。

(左) 13 『視聴草』第18冊3集之6 87丁裏～88丁表
鱧(鰻)組の吉野屋儀右衛門、萬屋吉兵衛などの食べた金額、そば組の桐屋五左衛門、鍵屋長助、山口屋吉兵衛などの食べた量が記されている。

酒癖あれこれ～『當世七癖上戸』

戯作者の式亭三馬が、庶民の滑稽な暮らしを描いた大衆小説(滑稽本)の一つで、酒飲みの性癖を紹介した『無而七癖酩酊氣質(なくてはななくせなまゑいかたぎ)』の続編にあたる。別書名を『新水鳥記』といい、序に、樽次と底深による酒戦を記した『水鳥記』とは趣向は異なるが、酒客(水鳥)の癖(酒癖の悪さ)を取り上げたゆえ、このように名付けた旨を記す。三話からなる。

第一話は、酒を飲むと、腹を立てて怒りやすくなる腹立上戸の呑太郎、泣いてばかりの泣き上戸の妻、お福の住む裏長屋に、姪のお粕の奉公先を世話する、飲むと笑ってばかりいる笑い上戸の客が、請状の印をもらうためにやって来る。酒や蕎麦などでもてなしているうちに、夫婦喧嘩が始まり、泥酔した理屈好きの隣の亭主、理屈上戸の屈兵衛が、夫婦和合の理屈を説き、仲裁に入るとい淋しい酒盛り話。第二話は、一人で酒を飲むのが好きな、けちけち上戸のけち助の住む裏長屋に、飲み意地の張った、ぐびぐび上戸の意地汚いぶた右衛門がやってきて、酒をしつこくねだるきたない酒盛り話。第三話は、江戸に出て町人となった、飲めば飲むほど無言になる黙止(だまり)上戸の勘右衛門と、藻嵯村(もさむら)の農夫で、飲むとやたらと絡んでくる愚痴上戸の権十という、同郷で幼馴染の二人の田舎言葉が飛び交う、煮売り酒屋(現在の居酒屋)でのうるさき酒盛り話(14)。

三話とも実話を基にした『水鳥記』とは異なり、その影響を受けた式亭三馬による全くの創作である。太平を謳歌していた江戸後期にあって、上方から下り酒として江戸に入ってきた酒が、一般庶民にまで広く普及し嗜まれていた様子がよく分かる一方で、飲酒を通しての人間模様、風俗、各人の酒癖の悪さを滑稽で紹介している。実際にあった大酒飲み

の記録ではないが、大酒会の背景として、酒がいかに当時の人々に親しまれ、日常生活に溶け込んでいたかが分かる興味深い資料である。



14 『當世七癖上戸』巻之下 12丁裏～13丁表
煮売り酒屋での黙止上戸の勘右衛門(右)と、愚痴上戸の権十(左)。上段の書入には、訳あって酒が飲めないことをぐるぐる式亭三馬が、耳が聞こえず黙っている書肆の青裳堂主人と、向島武蔵屋で遊んだ折、酒を進められて困った旨が記されている。

『當世七癖上戸』巻之上末、下 式亭三馬 作 歌川国貞 画 西宮平兵衛[ほか2名] [江戸後期] 2冊(合1冊)
<請求記号 146-14>

版本を当館以外では、蓬左文庫、京都大学附属図書館、東京国立博物館などが所蔵。

これたかこれひとみくらいいあらそい
是高是人御喰争



15 『是高是人御喰争』14丁裏～15丁表
東の関は是高が擁する虎がたけ(右図)、西の関は是人が擁する友の川(左図)。「鴨のやきとり小鍋たてふわふわ玉子湯とうふそはにうめんそうめんたいめん魚飯菜めし麦めし茶めしひやめし芋のにころばし…百はいくらいて…勝負ハつかさりけり…」などと大食い対決(闘食)の様子が記されている。

『是高是人御喰争 3巻』 岸田杜芳 (戯作者名は桜川杜芳) 作 北尾政美画 [天明7 (1787)] 1冊
<https://dl.ndl.go.jp/pid/8929525>

版本を当館以外では、東京都立中央図書館などが所蔵。

表具師のかたわら戯作や狂歌を得意とした、岸田杜芳による黄表紙(洒落、風刺などを盛り込んだ絵入小説)の一つ。食物をめぐる兄弟喧嘩が滑稽に描かれている。

深川の商人、和国屋清兵衛には、二人の子供がいた。兄の是高は乱暴で、とりまきも悪者ばかりであったが、弟の是人は隣み深く、品行もよいので、清兵衛も是人に跡をつがせようと思っていた。父に嫌われている是高は、何とかして、父お気に入りの是人を困らせようと、とりまきたちのそこぬけ四郎、跡引丈吾、腹ふと熊八、虎鯨じゃ五右衛門と策を練り、是人の病気見舞いといって、持参した大量のそばを無理やり食わせるという嫌がらせをした。今度は是人が、そばのお礼として鯨汁を振るまいたい旨を伝えると、是高はとりまきたちに、鯨汁を千杯でも万杯でも飲めるように、腹をすかせておけと命じた。ところが、是人が饗したのは、茶と干鰯の皮だけの吸い物で、死ぬほど食べさせるのではなく、質素な食事で、腹をすかせて困らせるといふ仕返しであった。再び是高は仲直りのため馳走をしたいと、是人らそのとりまきを

招くが、是高が用意した食事は生米、生魚、生大根など調理しないと食べられないものばかり。その時、是人を救おうと、抱え力士の友野川由二郎が、調理のための鍋、釜、包丁などを携えやってきて、即席に生ものを見事に調理し皆にふるま

い、是高のたくらみ、面子をつぶした。是高は友野川に十樽の酒を饗し、酔いつぶそうとするが、友野川はいともたやすくそれを飲み干し、是高の面子を再度つぶした。是高は友野川を何とか見返す方法はないかと考え、大食いである力士の虎が獄紀右衛門に、友野川との大食い対決を依頼した。是高、是人の代理戦争といえるこの大食い対決(15)は、勝負がつかず、立行司の木村庄之助よろしく和国屋清兵衛が、見学の群衆を押しつけて入り、引き分けと判定、以後は兄弟仲良くして、家を繁盛させよという清兵衛の鶴のひと声で、さしものは高、是人も仲直りしたというお話。

大食い、大酒飲みの様子が、創作された文学の世界でも記されていることから、江戸時代の人々の大食い、大酒飲みに対する関心の深さがうかがえる。

おおくらいじゆみょうのため
大食壽乃為

変人で「市中の仙」といわれ、教訓的な戯作を多く残し、俳人としても知られた市場通笑による大食いを取り上げた黄表紙の一つ。

蕎麦好きの惣先生と呼ばれ慕われていた、年老いた大食漢の喜惣八が、三十人の門弟たちによる蕎麦の大食い大会を催すと、一番の大食いは百二十杯、小食で六十五杯であった。飯の大食いについては、山盛りの小豆めし九杯を平らげる小豆めしの九平、しっかり盛られた茶めしと、豆腐のぐつ煮を十一杯食う十一平、菜めしを十六杯、でんがくと共に食う十六平太といった互角の大食いたちを紹介(16)。茶めしの十一平が鎌倉、江の島参詣に出かけた折、昼食で立ち寄った茶店で、奈良茶漬けを五人前軽く平らげていた、大食いの万右衛門と出会う。以後二人連れで旅を続けることになると、万右衛門は、休憩で茶店に入るたびに、まじゅうなどいろんなものをがつつ食い、戸塚じまりの朝食は七〜八杯、江の

島での昼食では、カツオ二本を刺身で、サバの塩焼きを三本、貝焼、クロダイのうしお汁を注文し、その他、いくらでも食う様子で、十一平をあきれさせた。

万右衛門の師匠で、けんどんじじいと呼ばれた大蕎麦食いの二八と喜惣八との間で、負けた方がその下につき従うという条件で、蕎麦の大食い対決が行われる。それぞれの大食いの門弟たちが、固唾を飲んで見守るなか、ともに古今無双の大食いで、蕎麦を四十八杯、茶づけを五杯食べたが、結局、勝負がつかず分けられた後に、二人は水魚の交わりとなった。じじいたちの大食いにあやかっ、寿命(長生き)は食(大食い)にありと、この物語の主題に行きつき終わりとなる。大食漢が敬われ、大食いが長生きの秘訣というこの物語の結末は、現代医学の立場から見れば、なんとも荒唐無稽でありえない話であるが、江戸期の人々の民間療法、人生観の一端が垣間見えて興味深い。当時の大食い競争は、単なる娯楽

興味本位の催し物として見るだけでなく、食文化の全貌を知る上で、欠かすことのできない出来事であったと思える。



16 『大食壽乃為』2丁裏～3丁表
 右から小豆めしの九平、茶めしの十一平、菜めしに田楽ばかり食う十六平太が描かれ、「いづれもごかくのくいてなり」と記されている。

『大食壽乃為2巻』市場通笑 作 北尾政美 画
 [天明3 (1783)] 1冊 式亭三馬旧蔵
<https://dl.ndl.go.jp/pid/8929334>

版本を当館以外では、東京大学附属図書館(靄亭文庫 <https://iif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/katei/document/ef2eadee-5566-41e6-9011-348c06bb5143>) や東京都立中央図書館(加賀文庫 <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100053331/viewer/8>) が所蔵。いずれもデジタル画像が公開されていて、当館本の欠丁(元表紙、7丁裏)の箇所などを確認できる。

大食いから 見える歴史

現代の大食い競争とほぼ同じ企画が江戸時代にも行われ、人々の関心の的となり、いくつもの資料に記録が残された。その多くは写本として流布したため、参加者の名前や年齢、飲食量など随所に相違が見られる。大阪の医師で、通俗性欲学の普及に寄与した田中香涯は、千住の酒合戦を「虚構或は誇張」と断定し、萬八楼の大酒大食会を「悉く嘘話」とし、「萬八」は嘘の代名詞でもあったという。

上方の富裕層が文化の中心であった江戸初期に、大師河原の酒合戦は行われたが、そこでは、比較的身分の高い武士地主、地元の名士などが酒量を競った。この時の酒合戦が後世にまで影響を与え、庶民が文化の担い手となった江戸後期には、千住の酒合戦や萬八楼の大酒大食会が開かれた。ここでは、老若男女が武士、農民、商人といった身分の垣根を取り払い自由に参加した。戦国時代のよな領土の奪い合いや、生死を賭けた合戦に明け暮れることもなくなり、太平の世が長く続くと、農業生産力も飛躍的に伸び、経済活動も活発化し、庶民の生活も安定し余裕も生じてきた。歌舞伎や淨瑠璃などの芸能鑑賞や神社仏閣への参詣

といった娯楽が身近となり、大酒大食会といった催しにも人々の注目が大いに集まった。市井の生活や風俗を取り上げ人気を博した、黄表紙や滑稽本などの戯作中でも、大酒、大食の様子が描かれ人々を楽しませた。庶民文化が隆盛した江戸後期には、天候不順などによる凶作も続き、経済が疲弊していった。やがて節約が唱えられ、贅沢を禁止する天保の改革が実施されると、大酒大食会も廃れていった。

最後に、江戸期以前、以後の大酒、大食の催しにも少々触れておきたい。

大酒飲みの記録としては、延喜一一(九一一)年、宇田上皇が亭子院で平希世、藤原仲平、藤原経邦、藤原伊衡ら八人の酒豪に酒量を競わせたものが最も古い。この時は大盃を回し飲みし、六七巡ほどで伊衡以外は皆、酩酊。伊衡だけが泥酔することなく、賞として駿馬を賜ったといわれる。

明治時代に催された大酒、大食会としては、明治一七(一八八四)年二月一日、東京府下南葛飾郡小松川村の加藤金吉方での大酒、大食会が知られていて、酒三升二合(栗田幸吉三九歳)、生米一

升七合(会主金吉二二歳)、三寸角の切り餅五三個(田村太郎吉三〇歳)、豆腐五〇丁(石川藤吉二七歳)、そばがき一升五合(清水喜代次二七歳)、はじけ豆(そら豆をいったもの)二升(藤井淺五郎二六歳)などと飲食の記録が残っており、また、同年二月三日の読売新聞の記事には、萬八楼の大酒大食会が今時あれば、第一等の位置を占めると思われる大食家として、柴田仙吉(三三歳)を挙げている、二升五合の餅を食べたうえ、酒と酔い醒ましの水を一升つつ飲んだことが記されている。

昭和期の大酒飲みの催しとしては、昭和二(一九二七)年、タダ飲みを防ぐため、参加代金を取って、埼玉真熊谷町で催された酒合戦が有名で、杯に金魚鉢が用いられ、一斗二升(熊谷町の住人六一歳)、九升五合(おとめという女)、七升五合(加須町役場の小使、中川巳之吉七二歳)などと飲んだ酒の量の記録が残っている。今も昔も人々の食に関する興味、営みは変わらない。食べ物に困らない、豊かで生活に余裕のある平和な時代であればこそ、大食の企画に対する人々の注目、関心は、今後も続いていくのであろうか。



『當世七癖上戸』巻之下 5丁裏～6丁表

文化・文政の頃の煮売り酒屋。江戸の随所にあり、飯、魚、野菜、豆など煮たおかずを売るだけでなく酒も飲ませた。「酒」「大極上中汲にこり酒」「御吸物 御取肴」と書かれた看板が見える。

○注 ※<>内は当館請求記号

1 池上家伝来の写本（上下2冊、樽次自筆といわれる）では、合戦の行われたのは慶安二年夏とあり、合戦の結末は和睦で互いのうちやわらいで、心のどかに三日三晩酒を汲みかわした、となっている。池上家にはこの写本と『水鳥記繪巻』（2軸、成島司直写、狩野董川画）などが残存する。『池上家文書』（第5輯、中道等校訂、1941<799-301>）に収録されている『水鳥記』は繪巻中の詞書きを翻刻し、写本との相違を傍書したもの。

2 喜多村信節 撰、近藤圭造 校訂『嬉遊笑覧』名著刊行会、1970（日本随筆大成 1916年刊の複製版）<UR1-8>

巻10上 飲食 p.490に、「……慶安のころ地黄坊樽次が大師河原の底深と酒戦のこと〔水鳥記〕にしるして世に聞えたり……」などと記載がある。

3 [斎藤月岑] 著、今井金吾 校訂『定本武江年表 上』筑摩書房、2003<GC67-H106>巻之2（慶安）年間記事 p.135に「酒戦といふ事行わる。慶安のはじめ、大塚の地黄坊樽次・池上の大蛇丸底深などと仮名せし大酒の輩、党を結びて酒を呑し事あり。其顛末を記したる『水鳥記』といへる冊子あり……」などと記載がある。

4 江戸時代の日本酒は、蔵元から樽のまま原酒（18～20度）で出荷され、酒問屋に渡る途中で割り水された。この水で割った日本酒（5～10度）が、江戸の町では一般に飲まれていた。ちなみに、酒を水で割ることを玉割りといった。

5 藤岡屋由蔵 [著]、鈴木栄三・小池章太郎 編『藤岡屋日記 第1巻』三一書房、1987<GB391-E3>

p.179「文化十二乙亥年十月廿一日 千住吉丁目中屋六右衛門が家にて六十年賀酒呑くらべ有之」とあり、各人の酒量などが記されている。

6『珍書刊行会叢書 第6冊』『街談文々集要 下集』珍書刊行会、1916 <https://dl.ndl.go.jp/pid/945288> pp.96-109に、「千壽催酒戦」が収録されている。

7 日本随筆大成編輯部 編『日本随筆大成 第3期第7巻』日本随筆大成刊行会、1930<081-N691>

pp.1-940に『甲子夜話』巻1-50を収録。巻11 pp.165-167に、「文化十二年十月廿一日千住宿一丁目中屋六右衛門六十賀酒戦」と題し、大酒飲みの記事を収録。

8 第18冊、84丁表～88丁裏「飲食闘會」。

9 1皿を200文とすると、約150皿食べたことになる。

10 前掲注5『藤岡屋日記 第1巻』pp.194-196。「文化十四丑年三月 両国柳橋万八楼にて、大食大酒の興行」とあり、稀人たちの酒量、食べた量などが記されている。

11 日本随筆大成編輯部 編『日本随筆大成 第2期第1巻』日本随筆大成

刊行会、1928<081-N691>

pp.1-346に『菟園小説』を収録。第12集 pp.310-312に、文化14年丙丑3月23日の「大酒大食の會」について、関忠亮（号は海棠庵）の話として紹介されている。

12『文化秘筆』写、1冊<103-247>

110丁表～112丁表に、「文化十四年丑年……兩國柳橋萬屋八兵衛方ニテ大酒大食會興行……」とあり、稀人たちの酒量、食べた量などが記されている。

13 江戸東京博物館が所蔵。デジタル画像も公開されている。

<https://www.edohakuarchives.jp/detail-4743.html>

14 田中香涯『医事雑考奇珍怪』鳳鳴堂書店、1939

<https://dl.ndl.go.jp/pid/1031424>

pp.237-239に、「盾唾物の大酒大食會の記録」を収録。

15『亭子院賜飲記』『国史大系 新訂増補 新装版 第29巻 下』pp.296-297「本朝文粹」第12「記」の内、吉川弘文館、1999<KG817-G18>

16『読売新聞』1884年2月14日 p.2「大食會」、同年2月3日 p.2「大食」17住江金之『日本の酒』河出書房新社、1962<5885-Su778n> pp.156-162「酒合戦」の項中の pp.161-162に、埼玉県熊谷町で催された大酒會の記事がある。

本山荻舟『飲食事典』平凡社、1958<596.033-M895i>

pp.234-235「酒合戦」の項中の p.235に、熊谷町での大酒會の記事がある。

○参考文献

『水鳥記』3巻 地黄坊樽次 著『江戸叢書』巻7の内、名著刊行会、1964（江戸叢書刊行会本（1916-17）の複製）<081.7-E22-E(s)>

古江亮仁『大師河原酒合戦』多摩川新聞社、1998<KG216-G9>

足立区立郷土博物館 編『千住の酒合戦と江戸の文人展』足立区立郷土博物館、1987<KC16-E54>

日本随筆大成編輯部 編『日本随筆大成 第1期第6巻』日本随筆大成刊行会、1927（『擁書漫筆』を収録）<081-N691>

大田南畝『蜀山人全集 巻5』吉川弘文館、1908（『一話一言』を収録）

<https://dl.ndl.go.jp/pid/993340>

三田村鳶魚 校、山田清作 編『未刊随筆百種 第8』米山堂、1927（『文化秘筆』を収録）<049.1-M465-M>

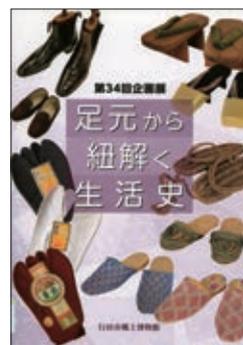
棚橋正博 校訂『式亭三馬集』国書刊行会、1992（『當世七癖上戸』を収録）<KG237-E9>

紀田純一郎・間羊太郎 共編『これが日本一 記録がなんでもわかる本』竹内書店、1967<Y88-373>

※ URL の最終アクセス日：2022年11月1日

本屋に

ない本



足元から紐解く生活史 第34回企画展

行田市郷土博物館 編・刊
2021.10
79 p ; 30 cm
<請求記号 GD64-M31>

埼玉県行田市は、足袋やスリッパの一大産地としての歴史を持つ。行田市郷土博物館の企画展をまとめた本書は、古墳時代に農具として用いられた田下駄から、昭和後期に定着した靴・スリッパに至るまで、日本の履物と暮らしの変遷を捉えている。

コウカケ、あとまる、七つはぎ、これらの名称から履物が思い浮かぶだろうか。七つはぎは、明治から昭和にかけて定番だった着脱しやすい紳士靴のこと。七枚の革を縫い合わせてあることからこの呼び名が付いたという。こうした別名の由来等、腑に落ちる説明を付した履物が並ぶ。中でも鼻緒履物の多様さは、日本に根付いてきた歲月の長さを物語る。民俗資料としての下

駄は、歯の形、歯を入れる穴の位置、台の形、塗の有無、さらには表の素材など、細かく分類すると膨大な数になるといえる。明治末期から昭和初期にかけて存在した下駄ローラーズケートに、昭和前期に用いられた海苔下駄。履きこなすには習熟と運動神経を求められそうなるまでである。

草履・草鞋も用途に応じて特化している。例えば、上野に立つ西郷隆盛像が履いている「足なか」は、「足半」とも書き、踵部分が無い。これはダイエツト目的で生み出されたわけではなく、踏ん張りが効き、中世の合戦時の武士から昭和初期の労働者にまで使用されたという。他にも、武士の旅装に用いられた武者草鞋、神官が履く鯖の

尾の草履に、江戸時代の俳人が好んだ和紙草履など、図録ならではの眺める楽しさがある。

履物そのものに限らず、日本最古とされる靴のカタログや雇用契約を記した文書、工場などの写真も収録されており、履物の製造・販売・普及の側面にも焦点が当てられている。国産靴の黎明の章では、舶来品と旧来の国産品との対決をユーモラスに描いた錦絵が目を引く。靴が雪駄と四つに組み上手を取っていたり、雪駄と靴の仲裁役だった駒下駄が靴に背後を取られていたり。明治初期頃の絵師は、靴を優勢とみなしたことが窺える。

これら歴史的な切り口に加えて、本書は各地の産業の紹介にも頁を割いて

いる。履物重要木工集団地域に指定され、最盛期には年間5600万足を生産した松永（広島県福山市）の下駄産業に、鎌倉彫や漆塗りを取り入れた静岡の下駄産業。現在も仕上げ工程は全て手作業で行う行田市の足袋産業。農閑期の副業として草履作りが盛んだった流れを汲み、戦後発展した南河原（行田市）のスリッパ産業と、地域に根差した履物生産の特色を伝えている。

足元から紐解いた生活史は、1970年の大阪万博を記念したタイムカプセルに収めた履物の写真で締め括られている。タイムカプセルを開く6970年には、どのような形状の履物が主流となっているだろう。

（光島有里）

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介いたします。

NDL Topics

資料のデジタル化に伴う原資料の利用休止について

国立国会図書館では、所蔵資料の保存と利用の両立を図るためデジタル化による媒体変換を行い、作業が終了した後は、原資料に代えてデジタル化資料を提供しています。このデジタル化作業のため、次のとおり一部の資料の利用を休止します。

利用休止期間

令和5年4月3日～令和6年3月31日（予定）
・東京本館所蔵の和図書 約42万冊

（主に昭和44年1月から平成7年12月までに整理された和図書）

※対象資料は順次利用を休止します。ご利用いただけない資料は、国立国会図書館オンラインの書誌詳細画面の所蔵一覧で、「作業中 デジタル化のため」の表示でお知らせします。事前に検索してご確認ください。

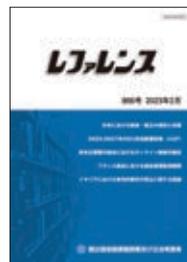
※詳細については、国立国会図書館ホームページの資料の保存・資料デジタル化について・デジタル化作業に伴う原資料の利用休止についてに掲載しています。

ご不便をおかけしますが、国民共有の文化的資産を後世に伝えるため、ご理解とご協力をお願いいたします。

新刊案内

レファレンス 866号

日本における孤独・孤立の現状と対策
2023・2027年のEU共通農業政策（CAP）
欧米主要国の議会におけるオンライン審議の動向
イギリス及びアメリカを中心に
フランス議会における議会倫理監視機関
イタリアにおける命令的委任の禁止に関する議論
国会議員の会派変更・党籍変更の是非



A4 132頁 月刊 1,100円（税込）
発売 日本図書館協会

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電話 03(3523)0812



#33
東京本館 春の利用者入口
photo by Saki

展示会

「東洋一」の夢 帝国図書館展

The Imperial Library's Dream of Becoming the Greatest Library in the Orient

帝国図書館は「東洋一」の夢を見るか？

2023
3.28^火 - 7.16^日

開催予定が変更になる場合があります。
最新情報については、公式ホームページなどをご確認ください。

【会場】 国際子ども図書館
レンガ棟3階 本のミュージアム

【開館時間】 9時30分～17時

【休館日】 毎週月曜日、国民の祝日・休日(こどもの日は開館)
毎月第3水曜日(資料整理休館日)

入場
無料



展示会場
撮影OK!

4

NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2023. 4

NO.744
APRIL
2023

CONTENTS

- 01 <Book of the month -from NDL collections>
Chemical abstracts of Japan: Journal of abstracts of scientific literature, which contributed to the development of science in Japan
- 05 Lecture related to exhibition at the International Library of Children's Literature
"Children's Books in Spanish from Spain and Latin America"
Children's books in Spain and Latin America during the last 100 years
UNO Kazumi
- 12 Past and present of statutes, parliamentary documents and official publications:
Changes in research methods
- 19 Strolling in the forest of books (29)
Heavy drinkers and big eaters in the Edo period
- 18 <Tidbits of information on NDL>
Welcoming future colleagues
- 30 <Books not commercially available>
Ashimoto kara himotoku seikatsushi: Dai34kai kikakuten
- 31 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

令和5年4月号 (No.744)

令和5年4月1日発行

発行所 国立国会図書館

編集者 松浦 茂

印刷所 株式会社丸井工文社

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
FAX 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp
<https://www.ndl.go.jp/>

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ (<https://www.ndl.go.jp/>) >刊行物>国立国会図書館月報でご覧いただけます。



NATIONAL
D I E T
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2 0 2 3 . 4

 国立国会図書館
National Diet Library, Japan

図

国

国

書

人

士